本曾路名所圖會

一中

ル 3
3765
2

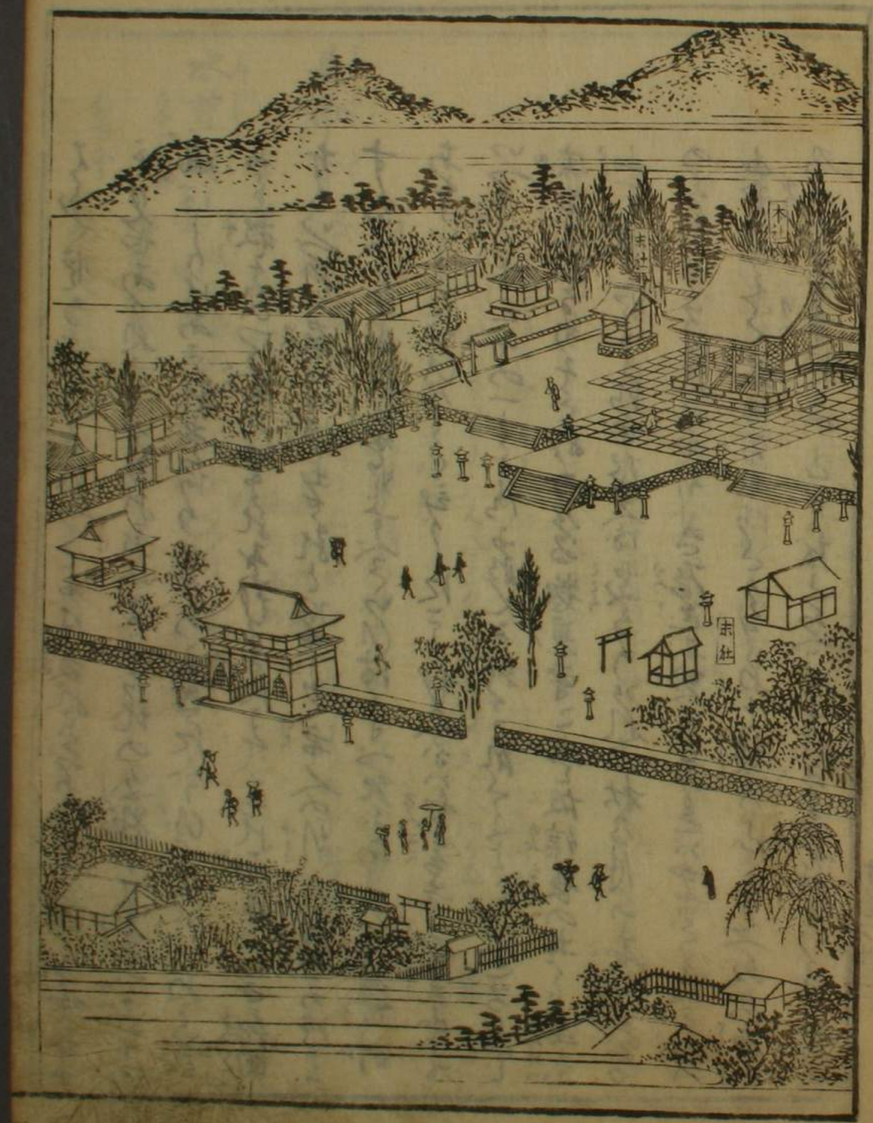
門ル 3
3765
2
望月家藏
49-2638

大嶋社二前 日前ふ神楽殿 本社の方 拜殿 本社の
樓門 本社ふ向へ云賀茂甲斐 古代の社 ふして 彩都 詳ふらに
鳥居額 八幡宮と書に 持明院大納言
基時卿の筆なり
其外末社多〳〵畧之
文當社の領産を原ふ社傳云人皇十三代成務帝高穴穂
宮ふ坐〳〵即位の御時武内大臣ふ命じ此瀛津島姫
大神を神を祀しむ厥后神の告よりて八幡宮城内殿ふ鎮
を敬天慶年中平將門追討の附六孫王經基公系統ありて
祈願をこめ〳〵直ふ賊敵亡びぬ因茲山上ふ移〳〵火振八幡宮
称〳〵八月十日例祭を行ふ物忌に湯成院の御宮天下旱魃の
時祈雨を祈ふ速ふ霊應ありしより毎年三月十五日御山
垢離の神事ありて矢臍の法より始まる本家此國より始まるより氏の神
と崇信〳〵神領五百餘石を寄附〳〵生土三十餘箇所を附〳〵

神威光耀〳〵長德三年より放生會執行〳〵寛弘二年五月
禁に一社城勅祭して下の社と称に弘安中見に蒙古襲ひ来時
奉幣ありて忽神風ふ起れく海上ふて亡びあ七神より星霜重り
永禄十一年九月信長公の為ふ迫ひ國作く本家十八箇所一度
滅ぶまに神社も此時大ふ衰弊して絶ふ跡其頃豊臣秀次
此山ふ城を築に〳〵ふ発れく文禄四年に亡び慶長五年に初めく
平天下と成り〳〵より神殿を再興〳〵爲親ふ入ふ其後寛永廿一
年関東の命に〳〵より神領五十石神職の除地を賜ふ神德ふ感
ぜ〳〵ふ霊驗いちじるく故に見る

八幡山十景和歌序　　小村季吟法印

卯月の十日あまり此山の八幡宮乃神ワざにきうて作りてサく
うけく作っゆく里ふハワるやあ名ふ神の土新しきを日ふ
はるこ彩まに成錦ふ尾上よりの月のうみうえめ出



八幡
比年禮社
八幡宮

なるべく恨るがゆゑにかくよみてよは妻なるべきあるゝ人の意味なる
とも見ゆ又あるはさゝ寺夕日の新にまさむ此の名妙にして是のよしなる
鴻はよりのあさまれ岩谷のこゝろのみきに今ひとつたるゝとゝ合
あさも数をひつて蒼乃中すれ景にむかしよりてある此両岸ところ花田
なる此の家にて深き出あれと済年々寄人のほりひ海士の湊とも
するもしらくゝれ景にすべくいひはずつ祀にあるは佛の所計
あまたしていひ伝へくる所にさしもある今の観音寺衣笠山とも
いふ三十三所の一にて緑なる風情にも是より上に道はまいりて
安土の山あはそこらあたる揔見寺とて是が坂信長の城にて遠景
山下浦に添うて海せなる人の所ありけれど秋乃月の夜を眺め
のかれるとて見せあるき處にて四角に見えヤパ寺あまさりに三上の
山老そびえて本の男に所さえるねと鏡乃山をも見えたる庫出
乃八の美景にてこの山く故ふまたて十此景あまたをいらてかたくは

見ゆる道さんしるなり其衣笠と都の小山よりは此豊浦と櫻乃
葉井此東にあたる名よりけれはうしまゝ此國の名ところあまた三上
ゆかみ山などの寺しられて紀寺枕るともすれはいろくろやまと寺
あはよみいでるんとたはふれけれどそれもさしもかくもかゆるしもむ
なとまるくよせんれどすべらず

歌よりれするあまたる此山の八幡宮の神わざに結ひて
世くにけて伝ふゆく男にいへる山名寺に新の志を添るなる　素琴

十景のうち八幡晩鐘

入相にむすぶはなけのひかりゆく神もつかさる寺の声　仝

長命寺　長命寺　山中光の上に有り八幡より五十町許
西国巡礼三十一番の札所也

本尊聖観音　聖徳太子の御作

水茎岡　八幡の南の岡山をいふ契沖の
比城篇には飛驒の國とうや
古今大歌所
水茎の岡の屋かたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

新古今
みつくきの岡乃葛葉をふきかへし今朝かれぬ秋のはつ風

乳脇法師

後拾遺　水茎の岩ぬ濃茅の蜂刺乃如わすれぬ秋をこそ思へ　九條院

新後撰　みるめの岩乃まゝ蔦とあゐれ往む里の志るべと杜風そ吹　定家

玉葉　吹うるの色く形るようみるふきの岩乃蔦紅葉を面付ふるわ　人丸

同　いつわるまたくふこそ濃れ茅乃岩也の雪あ沼をほく焼　乃家

後拾遺　はるるるの紀人よるんせもやみる茅れそう乃萱生れ乳母を紀を　藤左大臣

新千載　代くの形紙ゆすれと恋しせ水茅の岩れ濃茅の杜乃秋の月　良二経　物忠

同　水茎の岩色れ篠の一筋ゝ苔このよに物に云の琴も哉　五条信長

同　みるめのそう乃茅稲のうら秋をこ秋とむすんいりと稲あ秋を　六条内大臣

新後拾遺　水茎の岩べの小田乃夕ゝふ嬉うる紀分て早苗こ居るう　平常弘

同　幾ふひを書こ秋を中めれる紀のそうれ萱ふるひく斗に　勝一郎書家

新後拾遺　みる茅の岩也も志ゝやこ尾乃窶引を志ていつる狩人　徳中納言雅孝

嘉元百七百首　稲くあるる人命形ゝん水茅の岩れやうの杜れよの月　為定

同　水茎のそう乃秋ゝ杜色てゝれ秋にのこ居をの夕ゝせ　伊製

蒲生野（がまふの） 武佐より半里ばかり西生木村右の方にあり

拾遺

蒲生野の玉のをやまに住む鶴の千とせは君が御代の数なり　読人しらず

光行紀行

行暮ぬれば武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ　暁の鐘の声は暁風にひゞきて夜ふかく都にある人おもひやらるゝ　かの遺愛寺の鐘の枕をそばだてけん寝覚もかくやとおぼえて哀なり　行すゑの空も[illegible]けられて何となく物哀れし

都出ていく日もあらぬに今宵はや老曽の杜の松風
しかながら出てゆくゑの嶺の雲たちかへり老曽の杜よ
ながむれば下葉色づき朝つゆに松の紅葉もけふよりぞみる
月日へて
かりにしか家路をいそぎ来し方をこひそめけん

老蘇杜（おひそのもり） 西生木のひがし西老蘇東老蘇の二ヶ村あり 南に街道のきはにあり

後拾　東路の思ひ出にせん時鳥老曽の森の夜半の一声　大江公資

新勅　かくしつゝ我身時雨の[illegible]果ぬ老曽の杜の色を知りて　源泰光

続拾　よそにのみ老曽の杜に鳴鳥も年をかさねて　読人しらず

新後撰　今はとて頼む蔭なく我身老その森の下縄　源兼泰

続千　我身こそ老曽の杜の風の本の木の下露にかゝる袖かな　前大納言俊光

新千　いつまでかなほ老曽の杜の言の葉の　為家

新続古　時しあれば六十を過て五十あまり老曽の杜の　一品法親王道朝

奥石神社（おひそのじんじや） 老曽の両村にあり 延喜式内之 石をまつると又石上とはよめる

祭神 天津児屋根命 例祭三月初申日 桐原に坂田の神を祭る生蘇の里の生土神とし

沙々貴神社（さゝきのじんじや） 延喜式内之 老蘇より左の方十六町許にあり 嶋郷の郷の宮と書にいふる由緒もあらん

祭神 少彦名命 例祭四月初午日 仁徳天皇 宇多天皇 敦實親王を併せ祭る

此教寛親王を宇多帝教丸の父迦和源氏の祖とし佐く本
あらはし山く貴をみる伝名し正家ハ鵜鷺と書仁徳帝の御輝と
大鳥鵜尊とやまる
当社を迦和源氏一統の祖神ゐて神領一百石又讃列九亀
京極家より之一百石附與ゐ給ふ其祖先代常ふ藻倉の代ふ三
十六人の國衆八十二人の郷士ゐり足利当氏卿の時佐木佐渡利
官入道乃巻一國を併呑し其後又迦列二つふ分ち之愛知川を
南を江南佐木六角と号し又也代江北佐木京極と云ふれう
連綿として弘治三年巳未義治兵乱義賢管領職を領ゐ
屋形と号し六角京極と共足利の代
号ゐり
宗

浄厳院 金勝山と号し浄土宗

本尊阿弥陀佛 慧心僧都の作
開山隆堯法印一流の祖 長丈六
ゐ於ゐく浄土宗と日蓮宗中宗獨ゐり 寺ハ天正七年三月中旬武田
及ふ暑し 津ハ信長公より

遠景山總見寺 安土山半腹ふゐり

本尊十一面観世音 禅宗 安阿家

三層塔 大日如来 脱土 毘沙尺 長 荘厳 英蘇 豊臣秀頼公の建立 天石動明王

圓通閣 本堂の高楼の名

此閣ふ至絶景ゐる 直下せば 慢 長公の祈願 建部侍従

閣上より 遠景 素山下 総見寺 信長公の祈願

総門頭

当山ゐ天正三年信長公の御建営ゐて開山ゐ剛可和尚ゐ
寺領八今日二百廿石餘附属ゐり宝閣壮麗ゐて清浄無垢
の梵刹ゐ本堂の中央ゐ安を見ゐふ特非永徳ゐ第ゐ男ゐ其
と棒を携へ蚊帳紙貼ゐる図ゐり
信長公其横ゐ云
人ゐ十ゐ寸ゐ手ゐ氏ゐ之ゐ
ゐて身ゐ
今ゐ代ゐて香大寂寞ゐて雲佛屋ゐ花ゐ猶時ゐ

臨一樹そゝ寺禄屋ホ迫くようて巻く更よ寿之月ハ湖と照
てむ〜にてろ〜ぶす〜ぶを志れる

安土山古城 勢見寺の山上よりの眺望 信長公の墳墓あり今ハ城中の石垣ばかり
信長記

正二位大納言兼右大将平朝臣信長公近江國安土山を城郭ホ撰へ可
旨御移〜て為奉行先惟住の郎左衛門尉長秀と可沈老名天正四年
丙子正月上旬被作出〜公長秀大工の棟梁を兼くは十七ヨホ
安土山ハ至く先雲信ホ可入奥豆或ハ飯治者匠ハも石集あるひハ
石を取べき山持ぬ〜て〜ぬ通路沼沢〜も云ば眼崖〜も云ば〜ぬ
走回〜く数と日ホ繕ぐ志る二月廿三日ホ信長公安土ホ被移御座
精力を励を幸神ハ〜ろ〜て周之寄宿者ハ駿馬二匹長秀ホ下ハれ
第依近習外様馬廻以下の屋敷刻あ〜ぬれば〜も虎ハ山上山下を
更ホ堂塔ハ〜ろ〜を買ぬ〜ろ〜ホ丸石垣の石を引せ〜ろ〜ホ大石を引ハ
幸月〜ホ深堀月ハ更〜ろ〜ハ何共御下知あ〜ぬれ〜も我者ド

ゆ之大石を幸ひ上る幸巨霊拔山烏獲上千鈞ホ昊〜れば幸城維ぶ〜〜く
其功已ホ成以都て信長公ハ幼より弓箭に推ぶて仁義道徳の学ハを
勢ぶ〜ぶ自然ホ私心形く理ホ晓く知〜ぬ〜ぬ功の益進び幸恰め春
氣発生賞罰正〜く邪正ハ雖ぬ〜幸生知〜も中ハ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
慶明ろ〜ぬ〜ぬの思ひハ紀者ろ幸自西自東自北自南思〜て服せ
〜ろ〜幸形〜ト書

太閤史 安土殿守天正四年七月より普請仰付ぶ

普請奉行 本村治郎左衛門
上一重之金具 後藤平四郎那之
二重目ろ〜 京都野阿弥金具
所之工棟梁 岡部又右衛門
小細工所之工 宮西遠左衛門
漆所 前刑部

唐人一覩　奈良京外ヵ焼

土蔵土塀の高拾七間付け上ハ七寸の天守瓦造らるゝ様ハ未代未代の絶
嘗るゝ先一重ハ土塀ハ南ハ二寸六ヶ上の廣サ南ハ二十間東西十七
間高サ十六間ハ是れあり柱の数弐百四拾本三柱の長サ廿八間七寸七分
或ハ長ハ二寸四方ハ御座敷の内ハ黒漆ゝ西十二畳敷ハ金の張付
墨絵梅花狩野永徳の筆人間の内書院これあり西ハ小遠寺晩陸
の画其外の障子ハ金ハ石ハ瓦屋根次の四畳ハ中の御棚ハ鳩の画又十二畳
ハ間ハ鷲の絵図之鷲の間ゝ次ハ八畳敷奥四畳敷鶴の雛と
鶴ゝ画南十二畳敷ハ漢唐の儒賢の画次ハ八畳敷ゝ東に十
二畳敷次ハ二畳敷其次ハ八畳敷これハ御腰掛の所ゝ次ハ八畳敷
右ハ西ゝ六畳敷御納戸又六畳敷ゝ松絵の障子勢金ハ小の方
ハ左義ゝ其次座敷ハ六畳敷御納所ゝ西六畳敷次ハ十二畳
敷ハ十二畳敷都合御納所の数七所これハ其中ハ金地焼を初め

玉ゝ敷ゝ
三重目十二畳敷花鳥の画これあり紀島の間ゝ別ハ四畳敷の
御座の間ゝ花鳥の絵次ハ南八畳敷賢人の間ゝ昆ハ熟葉ゝ
駒を出ハ仙人の画東ハ庇の間八畳敷十二畳ハ間上ハ八畳敷仙人
呂洞賓傳説等の画ゝ北二十畳敷ハ駒の絵次ハ十二畳敷ゝ
西王母の画西座敷ハ絵ゝ廣様二間ハ四畳敷御物置ゝ清潔
戸口ハ八畳敷の座敷ゝ柱数百拾本ゝ外ゝ
四重目西十二間絵ハ巖上ハ龍虎の戯ハ絵ゝ南十間竹の絵
竹之間ゝ次十二畳敷松と画ハ松の間ゝ東八畳敷桐ハ鳳
凰の絵次八畳敷許由潁泉洗ハて耳を洗ゝ巣父牛と素ゝ
帰ハ両賢の出ゝ故郷の体中で一ゝ画其次小座敷七畳敷法
形ゝ金庇ゝ次十二畳ハ内二間の所ハ手鞠花を画其
次八畳敷庭子ハ宗伝画を故ハ奪ハ間ゝ新ゝ

安土山
總見寺

安土山佛寺
遺搆山上寺
殿閣倩景宮
草木茅屋石階宗
廣嶽空懷考金盤
日經覺一沙工謀池
坳江水樓基叱秦
宮刻據竹系已征
馬驅西東豈為身
上憂作起蕭牆中
築逢鄭所嫌三日
聊称旌釜天自
為乙仍手版豊公
姿之二月築竟逢古
夢回玩茅雲峰流
茂墨草青苔蒼
火長吊昔榜領
月春風
西秋服部藩

五重目絵ゐ〜南小の破風口小四巻手ゑ彩あり内外ともに西垣
朱塗内垣金箔ゐり繪也釈尊成道説法の図十六大弟子各図巻
仏極彩鐵鬼諸鬼を画〜端板小花鳥画〜高欄葱珠脇板
あり上の七宝三間四方仏座蓮の内外金泥ゐり外輪も赤金泥く
四方内垣昇龍降龍天井小天人紅白の鞠を画〜仏座蓮の内中心
絵三皇五帝孔門十哲商山四皓晋七賢等の図巻狩間の戸織物
数六拾餘品柱ゐ彩黒漆ゐて布を着く其上堅地小黒塗ゐり漆以
吾妻〜英雄者〜其氏の壮観〜

信長記云

其頃天龍寺に妙智院策彦和尚とて頑学多才の活僧あり殊小
大明再渡和漢両朝の達人なる由聞参いひあり給ひ信長公〜安
土山の記を仰て所望ゐり給とされども固辞〜申され幸濃別波下南
化和尚〜七名僧等小依付〜れ強ひく推んとゐされ〜
ゐ推く其有仰捉ゐり仕人も亦策彦和尚へ命ぜ〜る宜おり書と

互小辞〜命ぜ〜ぬも命数活ゐれば辞ゐる不ゐり〜て則筆を
濡〜れ〜る其記小云

總見寺圓通閣小掲るく

古曰太山之前難為山。太海之前難為水。日域六
十六州之一州曰江。江左有山名曰安土。其山不
在高其名高大山也。蓋夫非山之獨得名。有寛仁
大度人居焉也。劉夢得不豈曰乎。山不在高有仙
則名。水不在深有龍則靈。夢得之一言可弁。按焉。
層巒之崎嶇乎上者自然金城也。滄波之渺茫乎
下者自然湯池也。自天地開以往。雖有此山一人
無識者矣。葛原帝王的的令孫。平清盛廿一代之
華冑。前右府君者禁庭綱紀。武門棟梁而實天縦
聖武也。先是天正四年之春一見此山便識萬古

城地。開闢洪基權輿于此矣。力士星馳揚石。巧匠
霧列運斤。則不終三年而其功大成矣。潛慮夫數
百丈之石壁。千萬間之大廈。何翅力士之力。巧匠
之巧乎。唯流出府君之一胸襟而已。目機之所明。
意匠之所巧。離婁之明。公輸子之巧。不可跂而及
者也。峻宇高堂之凌碧虛者也。極夜摩都吏之壯
麗兮。直欄横檻之聳翠崖者也。盡秦樓魏闕之華
美兮。布地硎碱者羕露內潤。葺屋瓦甍者帶霜外
光。西湖月之上玉階者。供府君之夜遊也。南浦雲之
飛畫棟者。催府君之朝吟也。颯颯松風之動金鈴
聲。呼萬歲山耶。紛紛白雪之映珠簾。影含千秋窻
耶。權門貴戶之圍山。戢然也。遠水鱗萃也。盡是無
不丹漆黝堊。寶塔之突兀出林間者。疑繪遠寺釣
艇之人浮蘆邊者。怪圖歸帆。瀟湘十里。風景嘉
陵三百里。山水不可同日語焉。英雄豪傑之擁繡
鞍出入于相府。貴介公子之飜錦袖往還于官途。
爭紅花紅葉色也。億兆民之富驕者。鐘鳴鼎食之
家也。見者反目駭汗。聞者拍手賞嘆矣。江北白鷗
懷惠占閑。江南梅花被化含笑。信及豚魚。威知草
木。當此時市人歌于市。野老扞于野。行者遜路。耕
者遜畔。雖堯舜民文武民不可讓焉。加旃起王道
之衰。修神社佛閣之破。續斷橋平嶮路。是故四夷
獻貢來復焉。八蠻解辮服膺焉。或臂俊鷹乞臣手
其幕下。或上良馬請將手其麾下。吁策勲偉兵哉。
鳳凰現瑞。麒麟呈祥者非今時何時乎。祝望祝望。
向所謂太山之前難為山。天下人亦將曰。安土山

之前難為山。野納雖蓬衡叢洲樗散陋姿。管見此
名山豈無感慨乎。率綴卑詞於八韵。述盛舉之萬
乙

伏乞　咲覧

六十扶桑第一山　老松積翠白雲閑
宮高大似阿房殿　城嶮固於函谷關
若不唐虞治天下　必應梵釋出人間
蓬萊三萬里仙境　留與寛仁永保顔

信長記云

岐阜

信長公御書を不意ゝ[illegible]南化和尚へ黄金百両小袖三重積殖又
金子百両弟子百両小袖三重二位法市御使として恩賜せられ
猶ゝ孫孫加て光を[illegible]

下沙門玄興拜稿

年も舞鶴にて已達せんと人々達せられる事あるべし金龍玉帛城
こんぐく支へ世に自然の災を防ぎ天龍寺破伝の所に補ん事と
はを考へ給へとこの人のつ瀧齋と付給ひ是を寛永名と改めさるべし
名は氏記にて不学力拙きくしを言葉を言葉にて事言葉を
許くこれを世の人今ふ知るまでも其公せんらく事歟
抑此城を信長公天下成就の時分初るれば其威勢強大にして
城郭天守を建り事は附属の諸侯大
夫の家別に百千の大廈新堂を造り名産孫等は程く城郭に圍繞
を事秦の阿房宮も如きく劣ざる程なり時に天正十一
年六月十四日未明ふ安土城の天守ふ明智左馬助光秀放ち焼
燼と成ふ佛也〻此附属土〻ふ迄今此城墟を見るふ叢に雀鬼
こて乱龍の形を遠〻林樹に蔭蓊〻して晴く天守の址ふ悠見
院殿の高貴なを建て所ふ石壁礎石あり北の方に湖水湖花と

して紅のゆきを噴て底沖ふ此良嶽此殿の高根に恵の峯むり長等の山列を遠く眺ふ此城
あしの炭を焼ふ南の方に図園隠〻として三上山を
風を東ふ桑実寺観音寺の古城西ふ蒲生野荒蕪〻
み形此城の眼下に遮ふ抑織田家の滅亡を鑒ふ秦の秦氏亡を教
ふ〻只天命ふて一睡の義乃覚えて如くなり世思られる

織山桑実寺 天台宗

本尊 薬師佛 脇士 日光 月光
十二神将
當山は古寺ふて むり自風六年中尊湖水ふ出現あり
其後元明帝の御宇ふ藤足公の息定恵和尚唐ふ渡り
桑実寺を建ふ本堂ふ極〻ふ麗何れも法を教ひ南山に建営〻

箕作山古城 東山道武佐ふ一里許

右の方ふあり

去程に技開齋柔禎子息右馬丞督義勝も亡て家老の者共は素信長
者國本殺向せ仁定て海道筋の城々を先攻落し給ふ稲山の城いけ及
の手寄て同く搦手より攻寄せ給ふ城をぞ勝て給ふ信長は尚亟の絵図を書細々こと山地深流
の難易を糺しび不敵の策謀をを賜ひ入給ふ
紀寺寺和田山へ押寄せ給ふ和田山へ入給ふ
為西られ和田山より奥うろ長絶の方へ勢を押廻し給ふ本陣本
相遠しと世見へ給ふ佐久間右馬丞尉本下藤吉郎丹羽五郎左衛丞尉
浅井新八郎柔て其地の責を不定られる事なれば関を作りうけく攻
寄給ふ本陣の門外を吉田の何某建組源八郎ど給られ山内人数を
下し一ちさ人せしけるを不禁と弱く寄報て人数を引寄せ見
城も続て叫き喚んぞ攻る間けるく陣中へ引入給ふと走けるを追掛
山のまもりく早能き兵ども或白鷺許対五騎ふいんでる事なれば

計勢とめられかれや者ども中定人の大将言葉様へ下知しけるは
より手む所より形ぐ人おもたもむ尾を新知ぐ世陸付て
旗内物ぐ人せ長入打入面もこ尾迎へんと引を欲ぐ人ぐ
思ひ人を笑て出て其不指まるい推く中へとひ引を佐久間
多不與せ作久間久六原田與助本下ぐ多不與せ行中半左馬
將須賀長篤尉本村隼人正丹羽ぐ多不與せ林志鴻助ぐ善
引を尾上を持を持く進ども一命を助られ山ぐ旗を差を陣を逆不
して陣ぐきと申る間即此由を巳人の大将人沒を引る不信長は
も幸られぐ多不おいる間佐久間進とあまり陣中の者ども一命
と助多陣を待を中尾を殺と落るいう進ぐ世何ひ中られば髪
角を幸の能中小斗ひ進と宣ひ引其作佐久勝岡を味
と髪上ぐ引る佐く本業よお返して髪はへ引られ其他城落
去せ引ぐ稲山の陣も其夜開退く紀寺寺も兎やせん角

観音寺山
鶴鶴城址
観音寺

やあらんとて引めれ種ざろく小三雲新左衛門尉三宅左衛門尉中
ゝ所ゝ是小こて人さを行ふ〳〵も清くいけふ〳〵ゝ〳〵一まり落さを清ひ
身を全くして附き武侍工夫令稽の恥を雪んと思ひさび疾く見
名ゞ居城へ退せん作人去ゝ家老の面くいつゞ計存られ作せ声
武放く申れ者も内く退くいあり也と毒をやられるものなな
あの鬼神の様なる信長小四郎本成果中く敵対中幸思ひもよら
ぬ作こそうせば我も明うんど早こくせ同じられ敗幸往別し
所うれば後波をしくいあんうれども上下共小命城助りたく思へ共兵
自ゝ枕元を切くゞり何の御曹子武へ推圍中捨ゞる丈其ゝ何ゝさ
形どり上許是て若ゝ上下九分ゝ形く上を下と親ゝ寺坂を下ゝ立く
女子共ゝ聲武ゝ有ゝ小悲ゝあひて泣れゝ泣ゝ聲く多ゝ小分も
さざう形ゝ孫ゝ同得く若ゝ有ゝ意小一幸平家のゝ都を落
さを捨ひゝ多北ゝ角やせ志れく表ゝ形て親ゝ吉の城落

去ゝ所ゝ武ゝ別く小揃鎧ゝ様く共一日二日の内小十八箇所ゝで開退ゝ
其外味方小後る者ゝ是ゝ人質を取其内小已が居城本ゝ也せ清小も有
退散ゝ有ゝ城ゝ是ゝ宗徒の人ゝ入れ有ゝ抑近江國中の城ゝ将棊
倒のごく波羅くゝ也落去ゝ有ゝ幸小信長卿の一胸様ゝ出る
智謀ゝ有ゝ者ゝ程留ゝ山ゝ有ゝど小政急ゝ為ゝ清ゝ能ゝ兵武ゝ多ゝ也ひゝ
簡様ゝ有ゝ事ゝ紀ゝ兼て敵の謀武ゝ聞ゝ有ゝ是ゝ角
ゝ為ゝ有ゝ嗚呼謀略の者ゝ幸挙てゝ人ゝ也ゝ幸ゝ也ゝ浅
井が家老小赤尾英伝ゝ中ゝ有ゝ侍の人ゝ安ゝ也ゝ智謀の深ゝ
幸ゝ有ゝ武ゝ漢の高祖の天下武謀ゝ有ゝ張良あ小く謀武
惟幕の内小めゝ王者ゝ作ゝ成ゝ幸ゝ有ゝ今味方の將ゝ本
下秀吉あ小く深慮武外小あゝ武ゝ幸和漢ゝ紀後ゝ表ゝ有

小松寺　箕作山の尾續き小平坂と申ス
平家盛の建立ゝ有ゝ小松寺十間許ゝ東に有ゝ聖徳太子の御建立の寺ゝ有ゝ
尾屋寺　ゝ有ゝ東大寺の尾を伝所ゝ有ゝ今ハ荒ゝ

雲居流るゝ處彫百ヶ所
徑の蹟あり

繖山観音正寺

本尊千手観音　西國巡礼三十二番の札所
毘沙門天不動明王四天王
本堂の脇檀に安置
開帳井観音　安置
元三大師堂　本堂の西南
當山を繖山五箇寺の其一にして聖徳皇の革創とぞ
佐々木家近州を領するより繖山を繖田家の騎擁とす
むかし江州に軒相なり

観音寺古城

信長正寺に陣
足利義昭を光源院殿御令弟南都一乗院御門主覺慶將軍
中興ぞ小三好左京大夫義継反逆して義輝公を弑奉る御令弟
覺慶公も討奉るべき謀あり江州石寺に潛伏を忍び給させ給ひ

近江の観音城を御憑ありしも兼續が子孫義弼三好と其江一味
を企あるよし訪まれ討奉ぞ山國に逃れ給ひ淺倉義
景公憑ありしかども果さず因幡に波年八月と織田信長と御
ありて即君臣の禮を結ん合戦しまし御保治の首途に近江の
佐々木公攻めよ月日あり其年八月朝田ゆく高城し其
外羅城十八箇所三日の内攻落し近江一国よ平均し永禄十
九月十二日上洛し三好を亡し中堂公逆會徒の和公を亡ぞ
それより義昭公將軍に任じ給ひ義昭公と信長と不快
其年を信長叛逆の謀書公望に義昭公捉び給ひ
甲斐信玄と計とし両公の間隙を密ふ逆ふ相
形ふ元亀三年七月宮作橋濃ふ相義弼信長雷殺し攻
賜る義服ぞ方く河内国を与へ給ひ摂津国
京都信長に幕下ふ麿に　武記云信長公天正四年四月近江國八幡安土山ふ城を築くあるべしを

地獄越

石馬寺

難して云ふ伊勢物語あり又それ敦盛の墓なり安土山より石馬川を渡る

地獄越安土山より石馬川に出る坂路なり

諺云此坂路甚嶮しくして細し今ハむかし観音寺滅亡去のとき

此道ハ逃落し者数多あるひと岩こゝ落び岩石ふうられ又ハ本の

根ハ踞跪して倒れふ其上風強く逃ふ者多し坂ハ名付くらふ

此岸より見物せば安土山の麓より湖水漲くやして眼下に八景の

市中長命寺山水差昆多墨鳥遊ハ向ハ琵琶湖ハ唐崎の松坂本

比叡山比良の高根あるを望田舟浦とゆきうハ近ちらハ沈めあさる

ハ高の聲有明の月ハけくつきかゝ孔海ハれ志ざして鮮やかに

て沈海一列の風景乃地なるべし

それより此路通りなれど

これなるなり本業なり地獄越

織山石馬禅寺

神崎郡石馬村の上ハあり

極楽寺海家多し市都織山と云

籤番

高宮の駅

紅葉あるハ

咲るけるる

いみじき

布織場

多く織て

国々へ出す

その名を

高宮縞

本尊　弥陀佛　恵心僧都の作

南無佛太子の像　作自作　鳥佛師作

四天王大像

十一面観世音　右同作

地蔵尊　運慶作

閻魔王　小野篁作

其外什寶ハ仕　朱衣の釈迦佛ハ唐思茶の筆不動尊ハ弘法大師の筆ホ陀二尊ハ恵心僧正筆跡見不動明王ハ元三大師の書ナリ

役行者の画新ク作ル　作自筆ナリ

八大龍王社　山頂ニ鎮守　旱の時農民ハ祈雨隆雨祭ル

ルトハ共附作神仏ハ　宮ニ祈テ雨降ル

柳尚ハ仕推古帝ノ時　宇佐ノ八幡宮ヲ北二家の作附鐙駒ホ百ル国内

弘巡視ノ時此霊地ヲ選ビ定ム其五箇所の一ツ

十一面観音　太子作

西方大威徳明王　上と同作

方丈本尊千手観音　安阿弥作

北方多門天　上と同作

役行者　作自作

又良馬も此里ニ多ク産ス　絶ホ石ハ　寺の歯ト　其石

馬介寺の禁農家の彩ル　年歴千歳ニ及ビ逆孔の時大ニ荒廃

せ弘迫年雲居禅師ハ　ホ再興ス　弘雲居松ハ此禅師ニ師事ス則雲

居ハ棲ル　弘雲居松ハ此禅師ニ師事ス則雲

常長ト賜ハル　愛知川　源ハ鈴鹿尾根ニ発シ東流シテ湖ニ注ク

名寄　愛知川

愛知川

高宮ハ武里八町ニ富ム　愛知の名寄ハ　佐敷名所

野ノ郷ヲ一渓流ス

此駅弘ク広橋村ハ　此ハ布施ヲ織ル　弘高文流と

ノ名ハ無橋ヲ渡ル　千枝村ハ　四十九院村ハ　四十九院唯念寺　四十九院村ハ　本寺東風

由緒弘ク　ホ新ル流の寺ナリ　本寺と号ス

本尊阿弥陀佛 長三尺許

当山ハ聖武帝の御宇行基大士の剏創にして初ハ法相天台宗兼学なりしが本尊弥勒佛ハ今宗となる
むかしハ本堂弥勒殿にて上人の御時今書院に安れ文和年中ハ
後光厳院勅願所となり後此山号の額を賜ふ院の御筆なりとぞ
座中四十二間の假山林の中に行基の旧跡あり
紫石 巾三尺許 此石聖日る天より下りしといふ所なり高サ及ばず
土中にあり
鳴るなり

馬塚 雲林院にあり弘長年中洛の老女馬に生れかはりしが清水の観音の告あれば其娘かの馬を養ひしが其馬此所にて斃れけれはよりて此寺の中に葬をなしふ御石集まる
あり然るに今は村に以て此所の店を見れば藤骨柳
行く の茶を帰りとなふ南に取り左の方に山崎といふ所あり
信長卿の代山崎源左衛門尉居城しける其次に…せ村
ありこれより高宮につる

高宮川 犬上川ともいふ郡の名によりて名づく

近江 高宮

鳥居本まで一里半 此駅ハ布を商ふ家多し
此わたり農家に高宮嶋細布多く織出すなりこれを
高宮布といふ宿中に多賀の鳥居あり是より南に一里許

道ちかし多賀の鳥居や春の雨　尚白

多賀大社 犬上郡多賀村にあり 延喜式内 神社二座の内

本社 祭神 伊弉諾尊

末社 本社右の方に神明両社 向日社 荒神祠 熊野本宮 大将軍社 同新宮
天神宮 稲荷社 子安社 左の方に三ノ宮 蔵王堂
神楽殿あり
経蔵ありし

拝殿 楼門 本社の前にあり
日出杉 神木本社の左の方にあり

寿命石 本社の前にあり一名誓掛石又枕石ともいふ後重源
上人…大仏殿再興祈願のため七日参籠ありしに
不思議なるかな柏の葉に延の字顕はれしと悦び
寿延ぜられけることよりて十八年目に成就せられしとぞ

神代巻云 伊弉諾尊構幽宮于淡海之洲寂然長隠

又云 伊弉諾尊登天報命仍留宅於日之少宮矣

高宮驛

多賀

大鳥居

宮嶋

仙臺屋

織え

織え

古事紀云 伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也

神書鈔云 日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也

近江在艮方日之所初出也故曰日之少宮出

雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社ハ天照太神乃ち〻ちおの沖神ハて埼ハ伊勢奉

宮の奉道を扶くあふ多く沿をるけり例祭ハ卯月二年の日

こ神ハ紙背んとて遠近の人〻高宮の所ハ群集して服ひたてし宮

山沖神乃威徳形ハ〻別ハ不動院として神領三百家ハ社地廣

してある附ハ芝垣ハ相撲あるて世ハ賑ひいたんとなる

山國の大社なりと雖も

多賀ハ因就を沖ハひく一里まだるわ歩ハ名乃りあり

不知哉川の堤ハ出るか

不知哉川 大堀村の東 一名大堀川 もあり

古今

いかゝあれとこの山ゐるいさゝ川いてゝとゝよ我名りけな

山おあるあれとあれとあれめはたゝ

続千

いさゝ川今や水も数ハ乃しこの山風ゝ

平時光

鳥籠山 いさゝ川の上ハあり 儀ハ鶴屋山とも云

新古今

あふちちる家の垣ハ繁ハ

支木

はゝ家れとゝの末ハ犬上や十ハ月ハ鶯ハこの山風

俊成

日

鳴廉ハ多ハ

石清水八幡宮 大堀村 御屋の たハあり 扇塚 近年に戸森田氏建ル

山ゐ〻ゝ麦根塚ハ出る道ハ乃ゝ又右の方ハ多賀ゝ衛乃人

出る道ハ乃ゝ東岡ハ乃ゝ条落の道ゝ又小野村道の右れ上ハ石佛

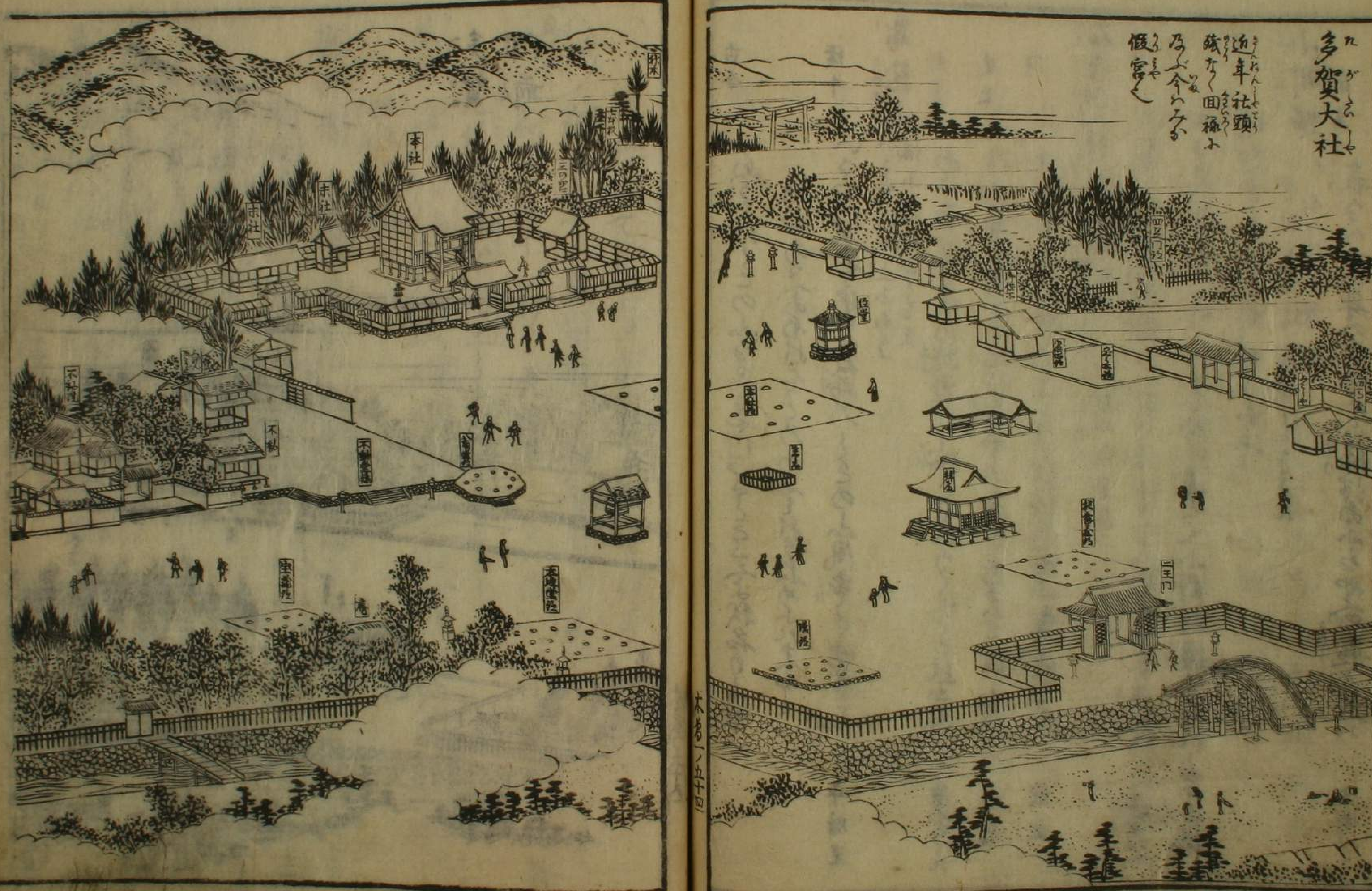
地蔵尊あり小町塚 小野村ゝ名付ゝ

小町塚 其 況の ゝ考ゝ

家集

衰ゝ我身の果やあさ緑はあふち世人の歳と云ハ

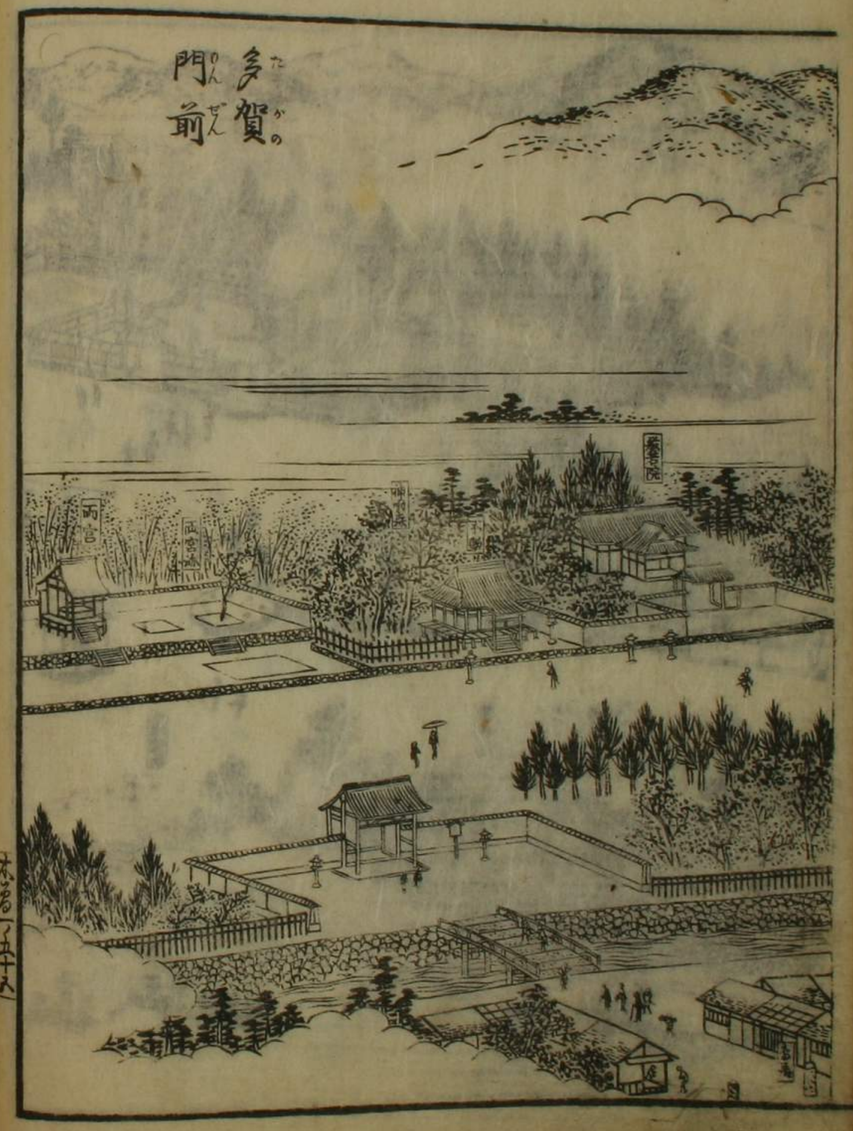
小町



多賀大社

近年社頭殘なく回祿に及ぶ今はみな假宮也

多賀の門前



終るまて身をはなさる思ひ名ちり走る舟の北の迄て

番場まで一里六町むかし多賀社乃名居は駅本あり

名津ろふ今は形ハ丸俗小島居は赤玉ともいふ居多

走根まで一里八丁六里は駅の名物神教

米原道 矢倉格とりつよりの道ハ米原へ三十町小玉郷道より石

道米へ下ハ 柳ケ瀬中河内と安ゝて

磨針嶺 山嶺の茶屋より直下せは眼下小濃清流摩耶形妻

里長浜ちるの小向山城見まハ行せ湖澳多果物小名志

津嶽鮮は遊ゝて潮水洋ゝたる中に山ゝ入ゝ弘見ゝ風色ゝ

英觀ちう茶屋ゝ望湖堂ゝ書ゝ彩乳州屋の茶屋沢ゝ壮観

ゝとのふ白芝の亀流人の茶屋ちう

走根山 犬上郡小野村庄家九七百姓 慶長六年井伊家ゝ下ゝ

法士名家 近江国ひこねゝ城下の町八十町

右文亦通後小ゝゝゝれまろ乃ゝ弁の名ゝふひ有ゝける

夫木　ひさかたの雲ゐの門と宮ゐと八重垣ぬきて井ぶ連ひかる　経信

月　よを聖寺荒田の山は名月見人も時くまなく光をそへる　弁乳母

ふく松原　荒田城下のわたる松原門あるこれより外を松原村といふ

後古　言ふよりも名をもれ松原ちりぬるを恋ぬ千ゑを君を万代　又藤の右長

礒崎社　松原村を過ぐ海邊二十町許りにあり

祭神日本武尊　礒村の生土神とす例祭三月八日

まりの船ふるれど坂険しくこゝ礒崎下まで礒崎村あり又湖の

礒邊に沿ひひくくして一里ばかり過れば汀小石の多きたり是

を人ふこゝばかりあり　扨八筑摩北原に沿ひ小石の方一丁許

だらう入まで社あり

筑摩社　筑摩村の生土神とす

祭神市杵嶋姫命　拜殿幸社のおあり

若宮祠　幸社の東あり両社の御釜竈八所幸社の

廻りあり廊端あり

近江国浅井郡明神山に神社あり神主の子に十二三ばかりなる女と男とをもちたる者ありて男あり女あり男は十五六ばかりなる童にて女は十二三ばかりなる童にて男女ともに髪をかしらにおきてあり

は

あるとき浅井の郡の人ども七人ばかりあつまりて猪の殺生をしていのしかをとりてあるなり

此社は延喜式に載られたる坂田郡の内の猪神社なるべし

むかし土猪の附て神を殺さんとて渡りて行くに馬にて行くに人ありて猪の右の中より一つ出でくまれもなく屋の飯を炊くに食をせしに

国司今を出でて人びとに毎年四月八日筑摩の生土の乃中より年に八つより十二歳までの女童紙をもてこれを猪を一つ被らせ烏帽子を持たるごとく神社に行くこと

筑摩野 神社のあれ地と

万葉

浅井郡に小牛所と云ふ所あり 笠女郎

昆妻里 筑摩の小一里まで行くに人あり山あり

文本 潮海やなかさ妻恋も出でぬるかなくに地を風の吹らん 家長

は

浅井郡に妻の郡と云ふ所あり氷をかくしたる所の所 後鳥羽

長濱 昆妻の小一里まで行くに人あり山あり

此地の元屋に絲編細編綿編絹柳其外種々の物あり所落

凡そ指所許あり

ひさしくめく御上城の長濱八幡あり

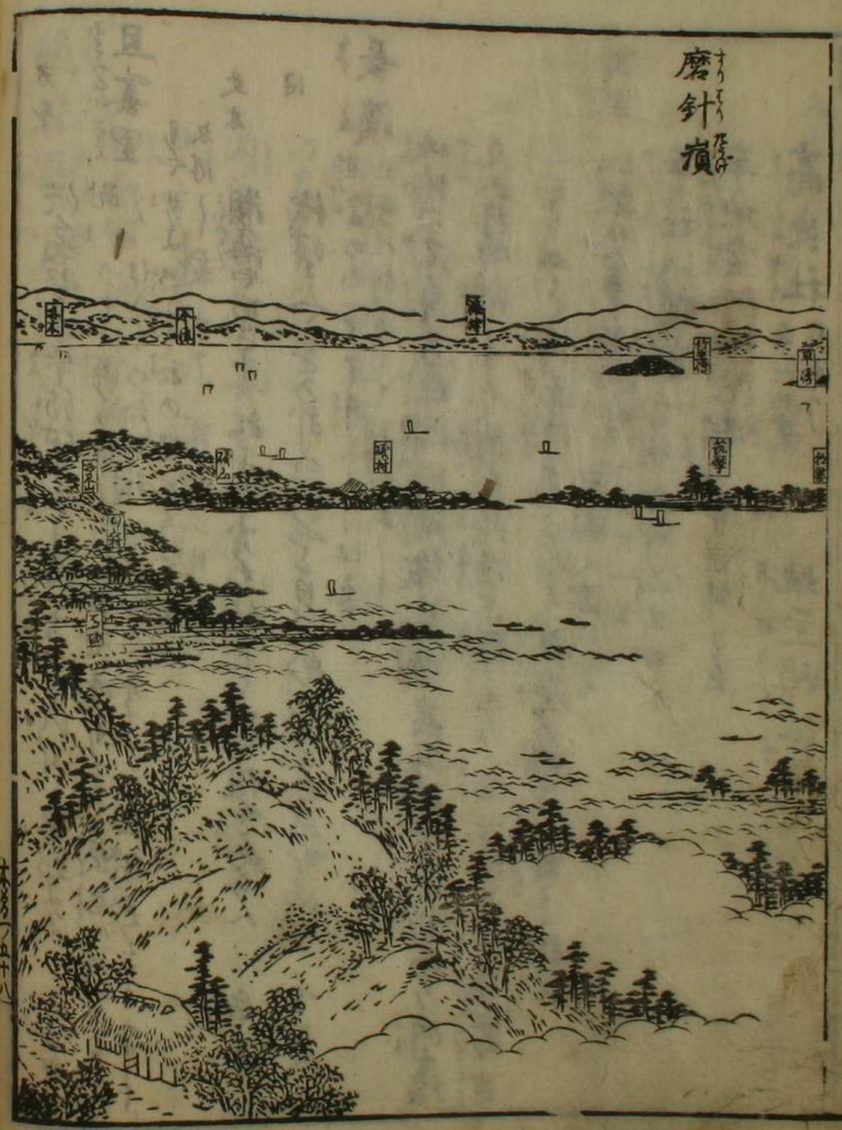
将軍山放生寺舎那院 長濱八幡の姫路人勢と

本社八幡宮 本地佛 石清水と

本地堂阿弥陀佛 本地佛 こん

高良社 本社の東にあり

地主神宮


磨針瀨

熊野三所祠　あふあり

稲荷祠　上と日ふるあり

藥師堂　日所あり

地蔵堂　上と日あるなり

護摩堂　日所あ清ふ

當社ハ初ハ八幡ハ郎義家公東夷征伐の時こゝふ勅使ありしとひ
厚く尊崇ありて社領三千石寄附ありしが其後後三條院勅願所
ゆゑ殺生禁の勅使下向あり放生舎を設りせ所星霜累りあり
天正の比信長の代大ひふ慶一秀吉公御生誕の時再興ありし社領
百十石寄附ありしが坊中妙見院の庭中八角呂利新左衛門作る
所之淺緋池蛇石恩智幻梅等ことに尤ふかう渡月橋の額を
春源の筆之例祭ハ九月十五日ありて毒山十二町さようの社く
出りて二神を舁て其山くの所ようりたふ風流の粧ひ云ふ
山のことく練り歩ひ至て壯観ありこれを見むとて遠近ようこそ
あつく一二万を消し群集ありて稲麻のごとく地ハ長濱糸

とて呼よ名高し此清旅所西の方ふかうて側系こそ神宝大刀其外持こと此神器おろ神輿ゐ秀吉公の代誓願ひ〳〵ゑ此所中ゑ
系の系日より芝居親拘ゐるゑ拘戸の居ゐうて旅ひ宮ん方ゐ
宮ゑ英雄ゑ後傑のもゑ兜玉ゐ〳〵其遺風今ゑあうて目を
喜ばしむる事鄙ゑ〳〵ゑ彩ゑ奇観と

竹生島 浅井郡船中ゑあり海の島ゑ繩と名付く繩ゑ長さ一町廣さ八十尋
東西七十五尋西百十尋東の岩下の岸ゑ東西へ通る穴あり
通ゑ〳〵く深ゑ穴の中ゑ弁才天女と号ゑ長三寸像ゑ七寸三分一坂小
本社雑賀天女 薬師如来土の俗ゑ云ふ延喜式都久夫須麻神社
宇賀神 左右二神 阿叱字賀神と称ゑ
観音堂 四時千手像長六尺三寸 行基の作
祖堂 行基菩薩大士の像を

竹生島者在江州湖中其巖石多水精寶珠本
朝五奇異之其一也。傳言孝靈天皇四年。江州
地折湖水始湛駿州富士山忽出焉。景行天皇
十年湖中竹生島初涌出云
昔行基菩薩来此島時神女現形建基初建
寺置雑財天女像
竹生島什寶
小枝笛 義経所持 皷筒 静所持 脇指 弁慶所持 吉次太刀
俵藤太太刀 天狗爪 馬角 二股竹
傳教大師最勝王經 弘法大師船板名鞆
玄上琵琶撥 松室童子琵琶 七ナカツノ毛
俵藤太十種内露硯 仁和寺覺寛僧正水精數珠
土像布袋 弘法大師作 矢嶋御所代々系譜

慈遺傳云ふ
松室の仲業ゑ法ゑ〳〵童あり名後ゑ竹生島ゑ棲て一日壺ゑ茶ゑ
毎年三月十八日ゑ竹生島ゑ行く神仏會ゑ〳〵雅ゑ無殺うう
願くゑ師の琵琶成佛ゑん仲業こそゑ琵琶を与ゑ仲業も湖水に

深き一夜仲麻呂が仲筭誠に
神しくなる松原に海の姿のけまことふうく花頼む沖の波うち郭　仲筭

四神出現奇

妻の歌乃法師間の白死鈴やけ清水うねも月の素らん

二月十八日より行生法師が紅ゑはるぐ雲弁さるの不老楽安為須史あうく
寄して紅の内小蔵るもの内う月まこびさ花あ幸まあ人〳〵琵琶く
仲筭こ神琴抱き新良止に則は琵琶こ〳〵小納しく仲筭も後小
其面瀧小登ア〳〵く其後ア〳〵石琴ア〳〵に　叙書出

保平寛喜記云
平経政は法師小消て神明法楽の為小一曲を強んしそ絶き琵琶とろ出
彼人や中宮安定幸こして寺僧即琵琶と抱く與人小和歌めき
よせ弱ひて楽二ッ三ッ弾く後弦上石上しらつ祝曲は弾ぐ弱ふ神
絶受や志くそひ乃む社壇より白狐出く遊びろる社不思議かん絶
正琵琶は関く神明の化現しめ〳〵けるく思ひ所願成就新と
てうき〳〵さふ

朝妻紅

千早振神に祈のかひありてやおほくも魚のかゝるなりけり

竹生嶋のそばに小嶋あり。これはかりそめに生ぜし嶋なり。又東に小嶋は勢田川の下流に黒津の大日山とてあり。此小嶋へむかし竹生嶋よりてらに不動を祭りしところなり。故に毎年三月三日嶋津の祭とて年あり。廻七十五間。水面より高サ廿九間六尺。又二つに嶋津の祭れあり

琵琶湖 南北二十里。東西七八里許。或は四五里。定らず。周廻六十里。鳰の湖とも いふ。以上二湖あれども。そのうちを其の湖ともいふ。別紙に出

續千載

風さゆるひらの水海雲きえて月影清し沖津嶋山　前関白太政大臣

同

さゞ波やひらの嶺おろし吹夜は浦風寒くうちそへにけり　為氏

新後拾

月かげをよせてる浦の秋なればいはまの塩の夜寒ならし　為家

夫木

時雨やうちにしぐれて出る月の沖に月落にけり　藤原さだかれ

餘湖海（よごのうみ） 伊香郡にあり。東西二十町。南北三十町。めぐり一里余。此湖は尾上川に流れて琵琶湖に入

夫木

さゞ波や余呉の山風ふきたてゝさむさまさる余呉の内湖　俊頼

同

衣手によごの浦風さえくてこだかみ山に雪ふりにけり　頼綱

雑和集

むかし近江國余呉のうみに織女おりて水あみけるに其ときひとりの男ありあひてぬぎ置たる衣をとりかくしければ天へ帰る事のぼらでやがて其男の妻に成て居たりしほどに子どもうまれて後ご衣を取出してきて天上へのぼりぬ。其後男恋しく思ひければ七夜まで天の衣をなげきけるに此男その時に逢ひけるに其間に此子父のかなしみて天女とあまりなげきければ女よろこびて其衣をきて飛上りにけるにこの子に契りけるは我年に一度あまくだりて逢ふべしとて七月七日に下りて此湖の水をあびて其日に帰るべしといひて別の涙をながしける。其子孫今までありと伝へけり

曽丹集

よごのうみにきつゝなれけむをとめ子が天の羽衣ほしつらんやぞ

諺云北野天神は此天女の御子なりといふ。故に湖の西に余呉の浦に天神の御旅所あり今にあり

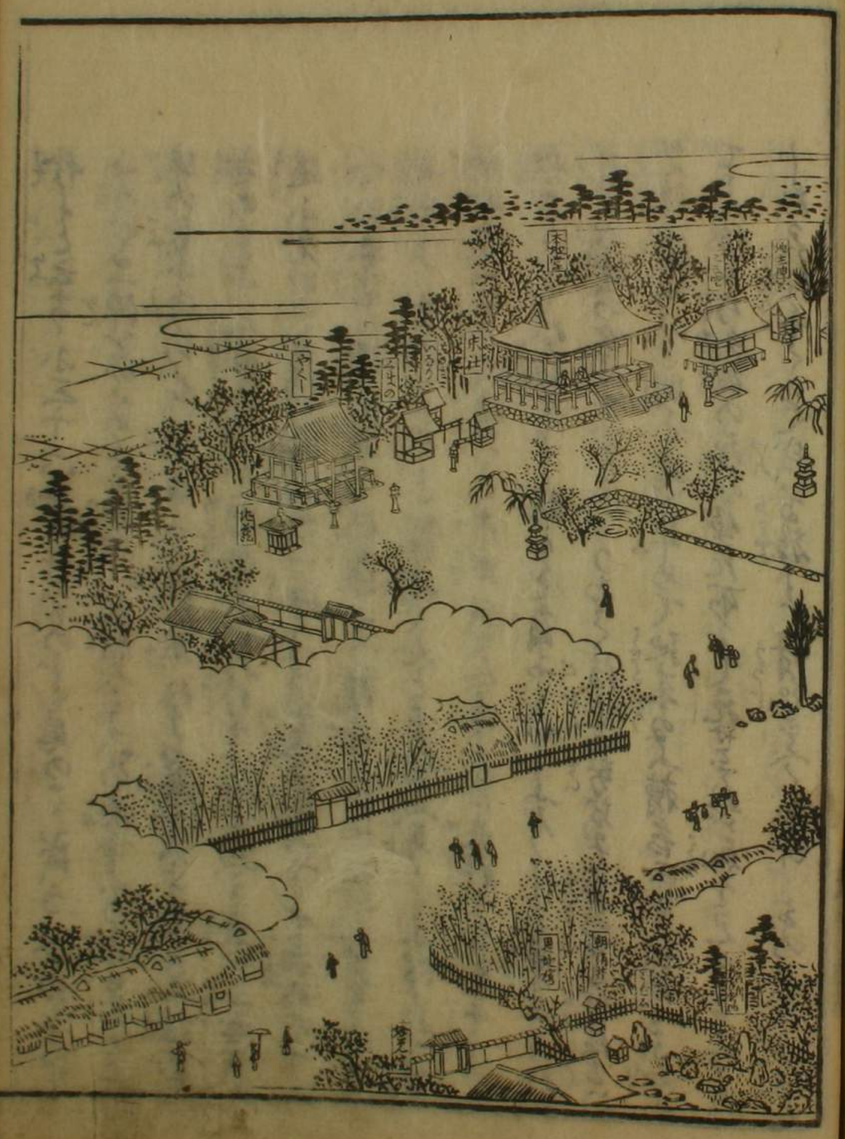
番馬（ばんば） 近江

醒井まで二十町。長浜より米原まで三里。これより東山道にかゝる。たどりの磨針山嶺をこえて坂路をおりて番馬の驛

みてこれを宿とす山家うれべ書家あるべき樵夫あるべて殺生をこのみ
名をも知ず此一夜平記に見えたる辻堂とぞ
八葉山蓮華寺 [時宗] 麦馬の駅中にあり
本尊 聖徳太子作 [弥陀佛] 聖徳太子作 [長二尺許]
獻頭梅 [老木なり] あり 六波羅山 寺号[聖徳太子開基] 弘三年[六波羅探題] 四千例人自害せし所なり
尚寺 [号上宮] 太子の獻那の地なりて角碁道日法師俗姓[号土肥二良]
元頼卿堂の左れ方小墓あり時宗三十五世円阿上人[号小田川]
今宗[号元弘三年五月九日尚山]の末山の末の末一向堂の前に於て小條
の連族及び随士四百餘人系都足利勢及討負これ[て]為[て]あり
自害を尚寺迄去牒あり執筆糟谷十郎と記し
本平記云 去程に六波羅系都の合戦に討負く関東へ落らく由披露あり
さんべあたり去れ原日夏坂ひそ名ち川小坂四十九院を引き麦馬
解井柏原其外伊吹山の麓なる山ぐち強盗溢る者ども二三

千人一族の程小馳あはせまうて先帝光の宮御遁世の体あく伊吹の
麓小悪びて御所おろるる拡大時小取まりて弾乃御旗を立て上ふ山
道光一の雑所番馬の宿乃東形る小山れ峯に取の宿り峯の下なる田
乃を中にたてこみく治けうる表洞ろんべ紙後守仲時志の原の宿と
て仏蹄と宮山の源を小伝しまる旅を出一時ろそ八体まれ共二ふ騨
ふあるうしかども沢弟小為散るるるや今ろべりふ七百騨ふを見
ざうるこ先行うう遅うけまる幸もあべ陽矢仕ま一そ体く本利皮
附信成べ後陸ふ打せられ賊徒道を塞ぐ車ゆべおちしてを乃を
あけよそ横岩三帝小先陣を手せられ書奥弾小体く麦馬
の作を越んする所小教千九欲道成中にたること楯を一面小ふ矢弟
成て後人く治けうう横岩ふ治ふこれをうく思ふる尚玉作玉乃
面堂ども為人の物具刑んそ殺うたるうんまいてあて抑
行るべ命を惜て殺小程の幸ハよもあ比共一けふけちして

長淡
八幡宮



捨てと云まゝふ三十六騎のほいめども馬のそゝ武ゐるべて我こうけ
こうける一陣をひかへくゐる野伏又百騎へさるの岸へやろうとて二
陣の勢ふ逆ゐうに新藤右ゑ一族の軍にうち勝今いとをゐふ陸ふ
者あしじやゝ安くゐひて弟秀のさん弟ゐ十ふこ色べこまの山路武
遥ふ見ゐひとゐれ度神ゐ旗一流ゐひ嵐よゐるびゝて兵又六千
人が程要害武者よりて〜結うけうゐ藤谷二陣の敵の大勢を見くく
退屈〜て我ゐ引ゐる市ゐくゐけ彼〜んとゐれべ人馬ともふはれて敵
険迫ふ文ゐう相迫付く矢軍武せんとすまば矢柱ゐふ射ゐ〜て
敵そくむくれ大勢ゐう鬼ゐを角ふもゐうふ尽〜ゐも見ごうゐれべ
藤ゐ付ゐ岩の方ゐふみふゐゐみく後陣の勢武ぞ結ゐる越後ゐい
先陣ふ軍ゐうと国く馬を早めて弛本ゐふ藤谷三郎越ゐふ命ふ
て中ゐ国ゐ弓矢取の死ぬ命れ不して死せざれべ恥をうゐとゐうゐい
〜ゐうゐ引ゐふ我名ゐる抜して討死さべくゐひ〜ゐものが一日の命

武將ゐてあれゐて蔵ゐて本ゐうく今ゐびひゐる死田文弟人のゐ本
ゐうゐゐひ武後程の蔵ふけゐうん事ゐ揺く進敵武一助ゐうゐゆく
ゐうべ身命を捨く打掛ひても通べいゐ推量仕ゐふ内ゐ七波が一族武
初ゐう漆友の張本にくゐひゐ〜ゐ抑を浮く矢法図を仕通さべせ
ゐ仕ゐんゐ〜ん右良の一族も度べれ石ふ度ゐけて遠江の山本城
城と搦て作せ風安ゐひ〜ゐべ安今ゐ事いゐ〜ゐこれ武敵ふうけ
て退治せん事恐〜ゐ方藤の勢ゐくゐけひゐ〜ゐ況やわ〜て藤
人の身〜ゐく人馬共ふけられ矢の一筋武もゐゐ〜ゐ射込き力も
なく成て作いゐ〜ゐて藤のひゐきたゐ後陣ゐ結ゐ本城陣結作く
迫江の國へ引く〜ゐ〜ゐくさうわねべゐ〜んゐゐ城本たて藤ゐて実ゐ
勢の上洛〜ゐんゐるゐ陣結ゐう〜ゐ中ゐ武越後守仲村ゐ城
と後ゐれゐも作く本〜ゐも今ゐいゐる野ゐうゐ藤ゐんたのゐゐ〜ゐ
それゐ進退ゐゐて面くの意見とゐひゐさんとゐゐくさべ何

さる仏堂小路くたずさえて時信河内くこと我と神定あるべしと百騎
騎れ兵どもみな辻堂の庭に我をとりかこむ佐く本利友時信を一里
ばかり引さがりて三百余騎打ちかるがつるふ天魔波旬のたぶさ取て有
りし六波羅殿を表馬の作りて無くれく一人も残し対れ
法ひとりと我と告ぐるを附信今いまは是迄なり行くとおもち門
より引返し修人ほ成く京都へ登ふるの越後守仲時をば時信
を遣しと待ひるるを結朝をば附うつわれば法を時信もしや
敵ふるれば今ものづくへ引へ一いづくまでも高べきされば
ふ腹をきるんぞる和と中く一途ふ公を定く京を捨人人
る其時軍勢をふむひて宮ひるは武運やうやく傾きて南家の
滅亡迫ふ宵べ中を見ひるるを弓矢の名誉とし月頃のよしを
を忘れて是まで付きくひ後ふんぞ中くふ言ふ中その
報謝の思ひ深せいども一家の運までふ尽ぬれば何をとて生を

報ぜべき今ものを我かくぐの為ふ自害して生を和の報恩仏後ふ報ぜん
と思ぞる仲時不肖なれども平氏一族の名あるふ身なれば敬
定く我首をとりて源氏の手ふわたし科を補く忠ふ備の人ゆ之果
ざ所言の下ふ提ぬぎて おりたぬぎ腹を切く婦ゆ糟谷三郎
宗秋これを見くるくるを提の神ふかを仏所を押て宗秋を手ばし自
害して冥途の御さを仕ふんと思ひ仕ひはるふ先ぐ仕ひるを
年三年ばかり今生ものを今仏孫乃御お遂見まて年ゆ其
途るんぞして見るべきふあ民習く法結り人死生の山
御供やりんして越後守ぐ柄ばかを腹ふはさを立て忠れる刀を取
て己が腹ふはさを仲時ぐ膝ふ立て付うつぶしにこそ伏うあま
を姫を始くして佐く本居度本司子良次郎左衛門三郎左衛門
毒丸高橋左衛門源四郎左衛門陸奥左衛門陸奥左衛門
源七左衛門尉門源四郎左衛門尉門左衛門尉門左衛門尉門左衛門

番場驛
蓮華寺
北条仲將
義貞一族
自害
古跡

洗の者ゝして都合四百三箱弐人日時ホ腹を切ろうろる血を其身ハ
ゝして恰も美河の流を乃ごとくなり死骸ハ産ホ充満して層ホ
乃肉ホ美ゝ沈をゞくの三千のてうきんホたゞびとうゝんの城
に百万の士卒河の水よ飲を馬ゝもこれ水ゝを色ゝ中を表をろる
幸ゞも見もあてらんぞゝよ言も彩ゝ乃を主上上皇を心死人
どものゝうを及弧御洗ゞるホ肝も切を御身ホそゞあゝれ果く
ぜおゝゝろる ト墨

番馬の宿弧りてゞ彩ゝよ所ホ如ふゝゝを来原の通あゝ
堀に村石おゝを通ゝく宿ホ如ゝさあゞ弁ホ為く

近江 醒井

拘原より一里半ハ駅ホ三水四石の名所あゝ所中ホ流れ育て
至ゝく清ゝ寒暑ゝを増減ゝ
日本武尊居寤清水所の中程民家の数
古事記云

草那藝劔置其美夜受比賣之許而取伊服岐

能山之神幸行。於是詔。茲山神者。徒手直取而。
騰其山之時。白猪逢于山邊。其大如牛。爾爲言
舉而詔。是化白猪者。其神之使者。雖今不殺還
時將殺而騰坐。於是零大氷雨。打惑倭建命。
白猪者。非其神之使者。當其神之正身。因言舉見惑也
倉部之清泉。以息坐之時。御心稍寤。故号其清
泉。謂居寤清泉也

十王水 浄瑠璃貴所 今石地蔵堂上ニあり
齒取西所ニ掘爪ホ
猪掘ゝ

水ゝきて新ゝゝを沢蟹の名ホそひ沢ホ川乃田石
西行水 羽西所民家の裏ホ岩間ゝう清泉湧出ん
池ホの里流ホ是ホも峠ゝを幸ろれも ろゝど

ゝゝゝ岩屋の浮世やさあるの水乃泡兄の消る形ゝひと 宗祇

日本武尊腰懸石 居寤水の後ホ山乃毒幸を清め移ゝろゝと
腰掛石の側ホあゝ苔ホ沢腰を
苔 蘚 をうけて体臭ゆゝろゝ

発石

蟹石　東の山間涌泉にあり

明神影向石　釈中原海寺の行林上人の記に

此里へ天降りまします地人神の志ゝやのこれ新田乃石　仲葉

賀茂明神社　涌泉の上の山ふ[illegible]地乃生む神　[illegible]

地蔵堂　石像地蔵菩薩安置　[illegible]

紫石燈爐　地蔵堂の傍れ上にあり　[illegible]

されば人皇十二代の帝景行天皇第二の皇子初の御名小碓命熊

曽建の兄弟両人を滅し給ふ紀倭建尊と号奉りたまふ東

夷を安く平らげ御凱陣の時紐帙山の魍魎毒気吹無しゝ御足跡

なほ[illegible]の清泉にて渫ひ給ふと忽平癒仕り給て名所古蹟

多し[illegible]元年歴二千八百餘年小及しも亦奇之水と古今変じ

ゝ名れもこの名れを至て清く清く張云英法國書老の流水に流を示る

[illegible]ひ給ふ此清水の来れ事有て考ふ来歴人達醒井解しく

名産紙書ふ夏の忘を素話と冷して旅客ふ出んみふ此清泉の渫ひ

なるべしと称ぜられる

川とあるを乗まて清し岩ゝあり出る醒井乃水　西行

水上に清さ[illegible]れの醒井ふ[illegible]紀世乃浜風て[illegible]

醒井の水[illegible]乃清ゝ[illegible]て志け[illegible]旅人[illegible]紀　長明

旅中わ養さめるのゝ[illegible]初[illegible]の[illegible]乃橋　能因法師

汲て志ゝ人ゝをまゝ醒井れ[illegible]紀ふと表ゝや見華　宋の釈王

きのふ立新乃花桜乃ふ[illegible]　今出川内侍号

夏の日芝志法人はうす紀れ[illegible]て醒井乃水　素良公

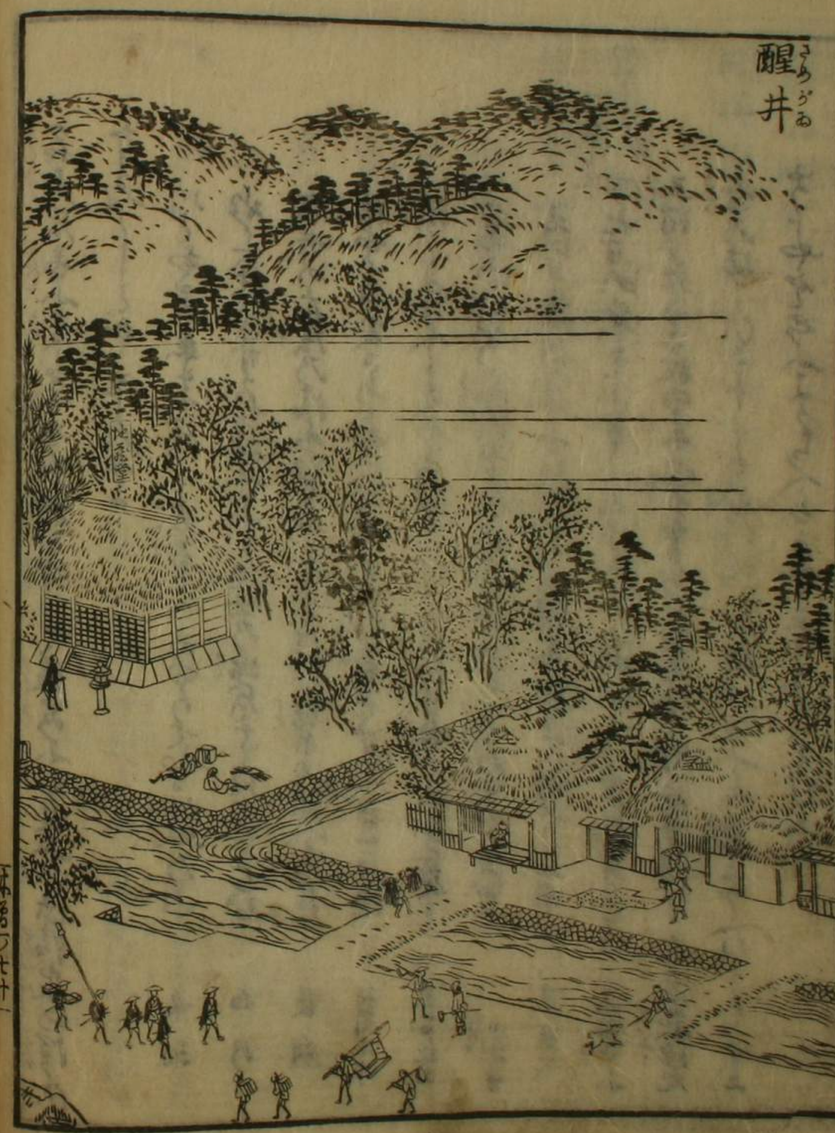
十六象日記

十七日の夜を小雨ゝ志ゆゝ[illegible]ゝ所ふ[illegible]月出ゝ山の峯ふ

立ぼ[illegible]る松の木[illegible]る宇ゝ光見ゝゝて[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]乃[illegible]ひ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]


醒井

日本武尊
居寤清水
腰懸石
此所ハ
三水四石の
名蹟あり

樂天堂佐藤了菴

元吉